社会的迷惑と共感性との関連

小　池　はるか

1. 問題と目的

近年問題視されている迷惑行為一般は，「社会的迷惑」もしくは「迷惑」という用語が用いられ，研究がなされている。しかし，社会的迷惑及び迷惑は比較的新しい研究分野であるため，まだ手のつけられていない領域も多い。例えば，一連の社会的迷惑研究は認知者側からのアプローチであり，一方行為者側からのアプローチを用いた研究は数少ない。

そこで本研究では，行為者側からのアプローチを行い，共感性と対人的迷惑行為生起との関連を検討する。具体的には，共感性が高い人ほど，対人的迷惑行為を抑制する傾向が見られることを検討する。共感性は情動的側面（相手の感情と同じものを自分の中で経験する）と認知的側面（相手の立場に立って物事を見て，相手の気持ちが分かる）に大別できるが，本研究においては両側面を共感性として扱う。また，対人的迷惑行為を「受け手が限定されている状況で，その受け手が迷惑と認知した行為」と定義する。

2．研究1

【目的】迷惑行為の過去経験と共感性との関連を検討する。共感性の尺度として Davis（1980, 1983）の対人的反応性指標（Interpersonal Reactivity Index：以下 IRI）を共感性の尺度として採用する。

【方法】<u>調査対象者</u> 大学生88名（男性23名，女性65名）。分析に際して5名（男性1名，女性4名）が記入漏れ等で除外された。調査は2000年10月に心理学の講義を受講する学生に対象に，複数の教室で実施された。平均年齢は21.48歳（20～29歳）。<u>質問紙</u> (1) 迷惑行為の過去経験の評定：6つの迷惑行為（「何時だろうが気にせず電話をする」「事前に連絡しないで人の家を訪問する」「友達に『お金を貸して』と頼む」「あらかじめしていた約束を直前にキャンセルする」「自慢話を長々する」「ひんぱんに愚痴をこぼす」）に関して過去に行った経験があるかどうかについて，回答を求めた。回答形式は，「したことがない（1点）」～「よくしたことがある（5点）」の5件法とした。(2) 共感性尺度：IRI の日本語訳（菊池，1999）。全28項目。視点取得（以下 PT）尺度，共感的配慮（以下 EC）尺度，個人的苦痛（以下 PD）尺度，想像性（以下 FS）尺度の4つの下位尺度から成っている。回答形式は，「まったく当てはまらない（1点）」～「よく当てはまる（5点）」の5件法とした。

【結果と考察】IRI 各下位尺度得点と迷惑の過去経験との相関を算出した。予測された負の相関は，愚痴と PT との間に見られた（$r = -.22$, $p < .05$）。一方，キャンセルと PD，愚痴と PD との間に正の相関が見られた（順に，$r = .35$, $p < .05$, $r = .46$, $p < .001$）。これ以外に有意な相関は見られなかった。

3．研究2

【目的】研究1において共感性と対人的迷惑行為生起との間に負の相関が認められなかった原因として，共感性の測定の問題が考えられる。すなわち，IRI が一般的な共感性を測る尺度であるため，特定の対人場面の共感を測ることができない点が考えられる。このことから，研究2では，既存の共感性尺度から不適切と思われる項目を除外し，対人場面に特化した共感性尺度を構成，信頼性・妥当性の検討を行う。また，共感性尺度と迷惑行為の過去経験との関連を検討する。

【方法】<u>調査対象者</u> 大学生227名（男性97名，女性129名，不明1名）。分析に際して22名（男性12名，女性9名，不明1名）が記入漏れ等で除外された。調査は2001年1月に心理学の講義を受講する学生に対象に，複数の教室で実施された。平均年齢は，20.95歳（18～29歳）であった。<u>質問紙</u> (1) 迷惑行為の過去経験の評定：研究1で使用したものと同じもの。(2) 共感性尺度：IRI の日本語訳から9項目を，Mehrabian（1972），Stotland（1969），Elms（1966）の質問紙尺度の日本語訳（地引，1982）から，特定の対人場面の共感を測るのに適切である11項目を抽出して用いた。回答形式は「当てはまらない（1点）」～「当てはまる（5点）」の5件法とした。(3) 人間関係志向性尺度：斎藤・中村（1987）の改訂版対人的志向性尺度（IOS－V）の下位尺度。全8項目。回答形式は「まったくそう思わない（1点）」～「まったくそう思う（5点）」の5件法とした。

【結果と考察】共感性項目について，因子分析（主成分解，Varimax 回転）を行った。その結果，固有値の減衰状況及び解釈可能性から2因子に分かれた。第1因子は，他者の苦しみに同情するという共感性の情動的側面を反映していることから，「情動的共感性」と名づけられた。第2因子は，他者の視点を取るといった共感性の認知的側面を反映していることから，「認知的共感性」

と名づけられた。各因子に対して .40 以上の因子負荷量をもつ項目を各下位尺度項目として採用した。α 係数を算出したところ，第1因子は .80，第2因子は .68 であった。共感性尺度の妥当性検討のために，共感性各下位尺度と人間関係志向性尺度の相関分析を行ったところ，各々正の相関が認められた（順に，$r = .44$, $p < .001$, $r = .31$, $p < .001$）。また，共感性各下位尺度と迷惑の過去経験との相関を算出した。キャンセルと認知的共感性，愚痴と情動的共感性との間に正の相関が見られたが（順に，$r = .14$, $p < .05$, $r = .16$, $p < .05$），これ以外に有意な相関は見られなかった。

4．研究3

【目的】研究2では，共感性尺度と人間関係志向性との正の相関が確認され，共感性尺度の妥当性が証明された。研究3では，妥当性をさらに高めるために，一般の大学生と比較的共感性が高いと予測される看護学校の学生との比較と，他尺度との関連の検討を行う。

【方法】調査対象者 大学生144名（男性70名，女性74名）及び看護学校学生126名（男性11名，女性115名）。調査は2001年7月に心理学の講義を受講する学生を対象に，複数の教室で実施された。大学生の平均年齢は18.56歳（18～21歳），看護学校学生の平均年齢は21.27歳（18～29歳）。質問紙 (1) 共感性尺度：研究2で再構成した全15項目。研究2で因子負荷量が.40以下であった項目を削除し，不適切な表現は修正した。(2) 援助規範意識尺度：全29項目。回答形式は，「非常に反対する（1点）」～「非常に賛成する（5点）」の5件法とした。(3) 内的他者意識尺度：全7項目。回答形式は，「全くそうだ（1点）」～「全く違う（5点）」の5件法とした。得点が高いほど，他者の内面情報に関する意識や関心が低いことを示している。

【結果と考察】大学生群と看護学校学生群の情動的共感性・認知的共感性の比較では，有意差は見られなかった（それぞれ $F(1,269) = .020$, ns, $F(1,269) = .053$, ns）。一方，共感性尺度の情動的共感性因子は，援助規範意識尺度の返済規範意識因子，自己犠牲規範意識因子，弱者救済規範意識因子と正の相関が見られた（順に，$r = .39$, $p < .001$, $r = .55$, $p < .001$, $r = .46$, $p < .001$）。また，認知的共感性と内的他者意識との間に，負の相関が見られた（$r = -.29$, $p < .001$）。

5．研究4

【目的】研究1，2において共感性と対人的迷惑行為生起との間に負の相関が認められなかった原因として，対人的迷惑行為生起の測定の問題が考えられる。研究4では，対人的迷惑行為生起の測定法として場面想定法を用いる。共感性の高い者は低い者より状況変化に敏感に反応し，適切な行動選択をすることを検討する。

【方法】調査対象者 大学生201名（男性89名，女性112名）。分析に際して9名（男性5名，女性4名）が記入漏れ等で除外された。調査は2001年10～11月に心理学の講義を受講する学生を対象に，複数の教室で実施された。平均年齢は，19.32歳（18～24歳。不明3名）であった。質問紙 訪問，借金，キャンセル，愚痴については，行為の理由の正当性を操作し，それぞれ迷惑高場面と迷惑低場面を作成した。質問紙には，1つの行為につきどちらかの状況を呈示することとし，2状況ずつ計4場面を呈示するように構成した。3つの場面（電話）については，迷惑高場面，迷惑中場面，迷惑低場面を作成，各質問紙に3場面を呈示した。(1) 行為に関する評定：それぞれの場面において「実際にこの状況におかれたら行為をするかどうか」について，回答を求めた。回答形式は，「当てはまらない（1点）」～「当てはまる（5点）」の5件法とした。(2) 共感性尺度：研究3で使用したものと同じもの。

【結果と考察】共感性下位尺度得点の中央値によって，共感性高群と低群に2分した。共感性と迷惑行為生起との関連を検討するために，4つの行為別に，情動的共感性（高群・低群）×場面（迷惑高場面・迷惑低場面））の2要因分散分析，及び認知的共感性（高群・低群）×場面（迷惑高場面・迷惑低場面））の2要因分散分析を行った。どの行為に関しても，共感性の主効果及び交互作用は見出されなかった。また，電話について，情動的共感性（高群・低群）×場面（迷惑高場面・迷惑中場面・迷惑低場面）の2要因分散分析，及び認知的共感性（高群・低群）×場面（迷惑高場面・迷惑中場面・迷惑低場面）の2要因分散分析を行ったが，共感性の主効果及び交互作用は見出されなかった。共感性と対人的迷惑行為生起との関連が認められなかった原因として，共感性の個人差と行為生起との間に何らかの仲介変数がある可能性，状況的要因の強さの問題が考えられる。今後，共感性と対人的迷惑との関連を検討する際には，これらの問題を考慮する必要があるだろう。